

中国返還後のマカエンセ (Macaense) のエスニシティ変容 —マカエンセ20名への聞き取り調査およびアンケート全記録—(2)

内藤 理佳

キーワード

マカエンセ (Macaense: 複数形Macaenses), ポルトガリダーデ (portugalidade), エスニック・アイデンティティ, エスニシティ

1. はじめに⁽¹⁾

現在, 中国の特別行政区の一つであるマカオ (澳門) は, 20世紀末 (1999年) まで約4世紀半にわたりポルトガルの統治下にあった。16世紀半ば, ポルトガルはマラッカ以東の東アジア貿易の根拠地としてマカオに来航後, 居住権を中国 (当時は明王朝) から明文化されない形で暗黙裡に獲得し, 以後事実上の植民地支配を展開していった。当初マカオに来航したポルトガル人のほぼ全員が男性であり, 彼らは徐々に現地の中国人または近隣アジア地域出身の女性たちと婚姻関係 (内縁関係を含む) を結び家族を構成するようになった。こうして, ポルトガル人と, マカオならびに近辺アジア地域出身住民との通婚・「混血」によって生まれたヨーロッパとアジアの「混血」であるユーラシアン (Eurasian), すなわち「ポルトガル人の血を受け継ぐ子孫」をマカエンセ (ポルトガル語: Macaense, 複数形 Macaenses) と呼ぶ。マカエンセはコミュニティを形成し, 以後4世紀以上にわたり世代交代を重ね, 人口の大多数が中国人であるマカオ社会におけるエスニック・マイノリティであり続けながらも, 支配階層であったポルトガル人と強固で友好的な関係を保つことで社会の中で安定した立場と「特権」を享受し, 社

(1) 中国返還後のマカエンセ (Macaense) のエスニシティ変容—マカオ在住マカエンセ20名への聞き取り調査およびアンケート全記録—(1)は流通経済大学社会学部論叢第21巻第2号2011.3 [42] に掲載した。マカエンセの出自や歴史, 聞き取り調査・アンケートの趣旨, 本文中で多用する「中国」「中国人」「混血」の用語表現に関する詳細は, 同号「1. はじめに: マカエンセ (Macaense) とは」を参照されたい。

会的・経済的に比較的恵まれた立場を築いていった。精神面では、返還前のマカエンセの別称として知られた「東洋のポルトガル人」(ポルトガル語: os portugueses do oriente) としての誇りを持ち、中国系一般住民に対するエリート意識を持った特徴的なエスニック・アイデンティティが形成されていった。

コミュニティが形成された当初、マカエンセのもっとも基本的な「定義」は出自にかかわる表徴(ポルトガル人の「血」を引く、マカオ生まれである)であった。その後、コミュニティが維持されていく過程で文化的表徴(ポルトガル語を話す、ポルトガル式の教育を受けている、キリスト教徒である)ならびに精神的表徴(マカエンセであることを自認している、「自分はマカエンセである」ことがマカエンセ・コミュニティからも認められている、ポルトガルとの深い精神的な絆・つながりが自己のエスニック・アイデンティティの中核にある)が加わり、一般的なマカエンセ像が作り上げられてきた。

ポルトガルの独裁制と植民地主義を終焉させた1974年カーネーション革命、そして1999年マカオの中国返還といった大きな社会的変動を経て、マカオに滞在する本国出身のポルトガル人の数は激減した。当然の結果として、ポルトガル人と婚姻関係を結ぶことが困難になり、かつての基本的条件であった「ポルトガル人の血を引く」マカエンセは減少している。さらに海外への移民を歴史上頻繁に繰り返してきたマカエンセ・コミュニティの中では、現在マカオよりも海外に暮らすマカエンセのほうが多く、同じくかつての基本的条件であった「マカオ生まれ」ではない若い世代のマカエンセが増えてきている。

こうした環境の変化により、現在、マカエンセの条件として重視されてきているのは、出自よりもポルトガル流の生活・文化環境のもとに育まれた精神的表徴である。とくに「ポルトガルとの深い精神的な絆・つながりが自らのエスニック・アイデンティティの中核にあること」という独特の精神性は、ポルトガル語で「ポルトガリダーデ」(portugalidade) という言葉で表現される。「ポルトガリダーデ」は、ほかにも「自分のエスニック・アイデンティティの根幹となる精神がポルトガルと強く結びついている」、「ポルトガル風の文化的価値観を自分の中に持っている」など、個人によってさまざまな表現方法が存在する。それはマカエンセなら誰しもが有する精神でありながら、きわめて習慣的・個人的な「情感的評価」であり、伽間的尺度をもって計測することが難しい精神性であり、明確な定義は存在しない。しかし、「ポルトガリダーデ」こそが現在のマカエンセ・コミュニティのエスニシティの基本となり、最も重要なファクターであるとされている。⁽²⁾

1999年12月20日の中国返還後、五十年間はマカオ従来の社会体制の継続が法によって明文化されている。しかし実際のマカオ社会は、返還後十年を待たずして急速に中国化

(2) マカエンセのカテゴリーに関しては、ケース9のインフォーマントが詳しく解説している。

の道を進み、同時にポルトガルの影響力を失いつつある。中国返還という激動の転換期を経て、短期間で刻々と社会全体が変化していくマカオ社会の中で、マカエンセ・コミュニティのエスニシティにも何らかの大きな変容が起こっているのではないだろうか。さらにマカエンセというエスニック・マイノリティは今後もマカオ社会の中で生き残っていくことができるのだろうか。

マカエンセの現状を知り、同コミュニティの未来への展望を探ることを目的として、筆者は2008年3月15日～31日にかけて15日間マカオに滞在し、16名のマカエンセにインタビュー（聞き取り調査）を実施した。本録は、①同期間中に実施したインタビュー全記録、②2008年6月に日本で実施した日本在住マカエンセ1名のインタビュー記録のほか、③マカオ在住マカエンセからの電子メールによる「マカエンセのアイデンティティ」に関する参考意見、④ディアスポラ（ポルトガル在住）のマカエンセからのメールによる「マカエンセのアイデンティティ」に関する参考意見（ケース20）計20件を記載したものである。

2. インタビュー内容・形式

聞き取り調査にあたり、事前に下記の質問を準備した。

1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？
2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」（ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり）を感じますか？
3. 返還後8年が経過した今（2008年3月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティ⁽³⁾に何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？
4. マカエンセとそのアイデンティティ⁽⁴⁾の未来はどうなると思いますか？

各インフォーマントの個人的記述に関しては、プライバシー尊重のため、冒頭に氏名のアルファベット・性別・年代のみを記し、なるべく固有名詞の記載は避けるよう努力したが、内容的にインフォーマントが所属する組織名などを明示する必要性が生じた場合はそのまま記載した。また、マカオにおけるインフォーマントの知名度を示す大まかな指標として便宜的に「著名人」もしくは「一般人」に二分した。

(3) 「エスニシティ」が適切な表現であるが、実際のインタビューでは「アイデンティティ」を用いたため、このまま記載する。

(4) 同上。

1) マカオにおけるインタビュー記録 (ケース1～ケース16)

実施期間：2008年3月15日～31日

実施場所：マカオ (マカオ半島16名, タイパ島1名)

インタビュー人数：16名

- ・年代別：20代2名, 30代1名, 40代4名, 50代4名, 60代5名
- ・性別：男性14名, 女性2名
- ・マカオにおける知名度：著名人8名, 一般人8名
- ・使用言語：ポルトガル語 (15名)・英語 (1名)

2) ディアスポラ (日本在住) のマカエンセへのインタビュー (ケース17)

実施期間：2008年6月

実施場所：東京都内カフェテリア

使用言語：日本語

年代・性別・その他の分類：60代前半 (推定)・男性・一般人

3) マカオ在住マカエンセからの電子メールによる「マカエンセのエスニック・アイデンティティ」に関する参考意見 (ケース18・19)

ポルトガル大使館に勤務する筆者の夫と、マカオのインフォーマントを通じて紹介されたマカオ在住のマカエンセから電子メールにより入手したもの。

実施期間：2008年3月 (ケース17)・2008年7月 (ケース18)

実施場所：メール形式のため省略

インタビュー人数：2名

- ・年代別：40代1名, 年齢不明1名
- ・性別：女性2名
- ・その他の分類：一般人2名
- ・使用言語：ポルトガル語 (2名)

4) ディアスポラ (ポルトガル在住) のマカエンセからのメールによる「マカエンセのエスニック・アイデンティティ」に関する参考意見 (ケース20)

実施期間：2008年7月

実施場所：メールによる回答のため省略

使用言語：ポルトガル語

年代・性別・その他の分類：50代前半 (推定)・男性・一般人

インフォーマントにリラックスして自由に語ってもらうことを重視したため、すべて

の質問をすることが不可能であったケース、質問に対して直接の回答が返ってこなかったケースも生じた。インタビューによって質問の順番は適宜変更したが、ここでは上記の質問順に記載した。インフォーマントの発言の中には事実の成否を確認すべき箇所もみられたが、本録では全文を記載することとする。インタビューで語られている事実関係や年齢などは、すべて2008年3月当時のことである。

なお、「著名人」8名へのインタビュー（ケース1～8）内容は、前号（流通経済大学社会学部論叢第21巻第2号2011.3 [42]）を参照されたい。本号では、「一般人」8名へのインタビューならびにメールで入手した参考意見（ケース9～20）内容を掲載する。

1) マカオにおけるインタビュー記録

〈ケース9〉M・B（男性・推定60代後半・一般人）

マカエンセの将来がどうなるのか、私にはわからない。でも、他のマカエンセに聞いてみてほしい。「あなたは、中国人になれますか。中国人になっても、マカエンセとしてのアイデンティティを保っていただけますか?」と。

ケース17の日本在住マカエンセA・K氏から、マカオ高校時代の一年先輩であり、長年の知己として紹介された。推定60代後半。小柄で痩せ型。顔立ちは一見してアジア系だが、何度か会ううちヨーロッパ系の風貌が目立って見えるようになった。非常にナイーブで真面目な印象。現在の職業は公認会計士で、マカオ半島中心部のやや古いビルの一角にオフィスを構える。父親はポルトガル人、母親はマカエンセ。父は当初軍人として1935年来澳、マカエンセの母親と出会って結婚し、自分が生まれた。マカオの商業高校を卒業後、ポルトガルのリスボン工科学院に進学。卒業後マカオで兵役を終え、会計士として仕事をする傍ら、高校で長い間教壇に立ち簿記を教えていた。

いたって質素な外見を保ち、一般人としての立場を強調してはいるが、家や車を複数所有しているという話しぶりから、裕福な生活をしていることが伺われた。インタビューの最後に、実は返還前はマカオ会計監査協会会長として、マカエンセ・コミュニティの代表する人物のひとりであったことを「カミング・アウト」し、次のようなエピソードを語ってくれた。返還前、マカオのすべての協会・団体の会長が、旅費もホテルもすべて中国政府持ちのデラックスな5日間の北京・上海旅行に招待された。喜んで行く者もいたが、自分は悪い予感がして三度固辞した。最後には親しいクライアントのひとりから執拗に乞われて仕方なく訪中したが、「相手を中国の政治システムの中に取り込もう」とする思惑があまりにも露骨で非常に印象が悪い旅だった。これ以降、自分は社会的・

公的立場から退くことを決意し、現在に至っている。

家族は妻と、ポルトガルでコンピュータ関係の仕事後をしている32歳のひとり息子。マカオの自宅は市内とタイパ島にあり、そのほかにポルトガルの首都リスボンと、そこから車で約一時間半のアルト・アレンテージョの田舎にも一軒家がある。夏は三ヶ月ほどこの田舎の家で過ごすことが多い。息子はマカオを嫌い、「たとえポルトガルで働くほうが収入が悪くても、マカオに帰るつもりはない」とはっきり言っている。一昨年(2006年)は海外で生活するポルトガル国籍のマカオ人がマカオの永住権を維持するための証明書を取得できる最後の年だったため、気乗りしない息子を「いつマカオに戻りたいと思うかわからないのだから」と何度も説得してようやく納得させた。息子は書類にサインするために二週間帰国したが、やる事が済むと証明書も受け取らないままポルトガルに戻ってしまい、書類を受け取ってポルトガルに届けたのは妻だった。本当は息子にはいつかマカオに戻ってきて欲しいと思うが、息子の人生なのだから、自分にはどうすることもできない。それに、現在のマカオを見ていて、マカエンセの未来がどうなるかわからないことを考えると、なんともいえない。

最初に会ったときから「もともとインタビューは得意でなく、一度に話をすることは苦手だ」、「私は政治的なことからはずべて手を引いているので…」と口ごもりがちだった。しかし、わずか二週間余りの筆者のマカオ滞在中、五回にわたるインタビュー回数は、もちろん全インフォーマントの中で最も多く、感謝につきない。初回は2008年3月17日、オフィスを訪問したが、治療中の歯がかなり痛むということで挨拶程度で終了した。三日後の3月20日、ランチに招待されて期待をもって出向いたが、この日も話がはずまなかった。しかし、3月22日夜、タイパ島の落ち着いたポルトガルレストランで約三時間、さらに翌23日も市内のレストランで同じぐらいの時間にわたり、マカエンセの歴史、そして、自らの人生について滔々と語ってくれた。とくに後者のインタビューでは、ある瞬間から感情がこもり、どンドンと話し始め、「この話をするのは、自分にとって苦しいが、話さなければならない」と少し涙ぐんでいるようにも見えた。その晩、インタビューを終えて別れたのはすでに夜十時をまわっていたが、手を振って去っていく背中から、なんともいえない感情が沸き起こっているのが感じられた。さらに帰国前日の3月30日にも市内のカフェで小一時間ほど話をし、本や資料をいただいた。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

その質問に答えるには、ポルトガル人がマカオにやってきた16世紀まで歴史を遡らねばならない。なぜポルトガル人がマカオに定住したのか、その理由を、教科書では「マカオが中国近海の高麗を退治したその見返りに、中国がポルトガル人にマカオ駐留を許

可したのだ」と述べているが、それは真っ赤な嘘だ。私はあるときマカオの歴史に深く興味を持ち、色々文献を調べた。実は、ポルトガルはアジアとの交易をする際の拠点を探し回っていて、当時、中国の中央政府が厳しく海禁政策をとっていた領域から外れていた上川島に目をつけ、次にマカオへ移り、中央政府の目の届かないところで現地の中国人官吏に賄賂を渡して駐留する権利を得たのである。つまり、すべては裏金から始まったのだ。

当初マカオにやってきたポルトガル人は全員男性だった。当時から長い間、中国人女性は外国人との結婚を禁じられていたので、ポルトガル人男性が最初に婚姻関係を結んだのは中国人以外のアジア系女性だった。こうした女性たちはインド、マラッカ、シンガポール、そして、日本からも、「交易品」のひとつとしてマカオに運ばれた。こうして生まれた子ども達が最初のマカエンセである。その後、マカエンセたちは彼らのコミュニティを作り、コミュニティの中で婚姻を続けた。マカエンセは次のように8種のカテゴリーに分類できると思う。

「第一のマカエンセ」は、最初にマカオにやってきたポルトガル人男性と、中国人以外のアジア系女性のカップルから生まれた子孫たちである。その中でも、ポルトガル人男性と中国人以外のアジア系女性、ポルトガル人男性とマカエンセ女性、マカエンセとマカエンセのカップルがあった。

「第二のマカエンセ」は、20世紀になってから出現した、カトリック教徒に改宗した中国人である。彼らはポルトガルの血は一切引いていないが、洗礼を受けた時にポルトガル式の名前をもらい、さらに代父がポルトガル人の場合は名字も受け継いで、完全なポルトガル人の名前を名乗るようになった。そして、自分たちのことを広東語で「この土地に生まれた者」を意味する「土生 (トウサン)」、またはポルトガル語の「マカオ」「息子」を並べた「Macau Filo (マカオ・フィーロ)」⁽⁵⁾と呼び、世代を経て、彼らもマカエンセと呼ばれるようになった。現在、マカエンセを代表するファミリーの中にも、このカテゴリー出身の者がいる。

同様のケースとして、多くの中国人の孤児たちを受け入れ、小学校から高校まで男児のみを対象とした学校教育をおこなっていたサレジオ会のコレジオ・ドン・ボスコ (Colégio D. Bosco) 出身の中国人。彼らはカトリックの洗礼を受けることによってポルトガル名を取得し、その後、マカエンセとしての自覚をもつようになった。そのほか、養子縁組によって同じくマカエンセとなった中国人もいる。これらのケースでも、世代が変わるにつれ、ポルトガル系のパートナーと婚姻することにより、ポルトガルの血が

(5) 息子を意味するポルトガル語はフィーリョ (filho) であるが、正しく発音ができずフィーロ (filo) となったらしい。なお、ポルトガル語で「マカオの息子」と言う場合はこの語順にはならない。

入っていくことももちろんあった。

ポルトガルはマカオとの関係の中で、歴史上いちどもマカオを「征服」したことはない。別の言葉でいえば、完全な統治は存在しなかった。現在の市役所にあたるマカオ議会さえ、マカオ領内に住むポルトガル人の管理はできても、中国人に対しては管轄外であったため、重要な出来事があると、オウヴィドール (ouvidor) と呼ばれていた人物が、国境を越えてすぐのところにあるマカオの中国人に関する責任を負う担当部署に向き、案件に関してシャッパ (chapa) と呼ばれる承認の書類を受け取らなければならなかった。また、当時の総督は軍事と防衛の役割を果たしていて、マカオ議会は行政を担当していた。その後、1846年にフェルナンド・アマラルがマカオ総督に就任し、これらの体制に終止符を打ち、ほぼ全権を総督が握るようになった。この時から、マカオの法律はポルトガルの法律に準じるようになった。

そこで、今まで中国人に禁じられていた外国人との婚姻が許されるようになった。こうして誕生したのが「第三のマカエンセ」、すなわち1974年4月のポルトガル革命までの間に、マカオに軍務のために来たポルトガル人未婚男性の軍人と、中国人またはマカエンセの女性との婚姻によって生まれた子どもたちである。ポルトガル人男性は兵役が終わると基本的には一度本国に帰国しなくてはならなかったが、もしマカオで仕事を得ることができれば帰国せずにマカオに残っても良かった。多くがマカオの警察関係の仕事についた。こうしてまたポルトガル人の血を多く引くマカエンセが生まれた。

「第四のマカエンセ」とは、1974年ポルトガル革命以後、ポルトガル人の軍人（未婚の男性）が全くマカオに来なくなったことを背景に、ポルトガル人子孫のマカエンセ女性と、現地の中国人男性との間に生まれた子どもたちを指す。

「第五のマカエンセ」は、1981年国籍法の制定以前、マカオに生まれた人間はみなポルトガル国籍を取得できたことを背景に、ポルトガル人の血を引かず、文化・教育・言葉すべてポルトガルに関係しないが、マカオ生まれということでポルトガル国籍を取得した中国人である。彼らの登録名はポルトガル名ではなく、中国名のままで、記載はローマ字だった。

「第六のマカエンセ」は、1974年4月ポルトガル革命以降、アフリカ植民地解放によってポルトガルへの帰国を余儀なくされた大量のポルトガル人たち（レトルナードス）のうち、本国で職もなく生活になじめず、仕事を求めて家族単位でマカオにやってきたが、やがてポルトガル人の妻と離婚し、アジア系の女性たち（マカエンセ、中国人だけでなく、タイ人・フィリピン人が多かった）と結ばれてマカオで生まれた子どもたちを指す。

「第七のマカエンセ」は、ポルトガル生まれのポルトガル人にはあるが、幼少時もしくはその後に来澳し、何十年もマカオで生活することによって、すでに自分のことをマカエンセだと認識している人たちである。こんな例もある。ポルトガルでは数十年前ま

で、子沢山の貧しい親が、子どもに教育を授けるために、教会 (セミナリオ) に子どもを託すケースが多かった。マカオ司教がポルトガルを訪れた際、八歳から十歳のこうした子どもたちを引き取り、マカオに連れてきて教育を受けさせた。彼らのうち、無事神父になる者もあれば、信心不足により還俗し、家庭を築く者もいた。後者の多くが、マカオに対する愛情・愛着を持ち、マカエンセを自認している。

「第八のマカエンセ」は、マカオの中国人家庭に生まれたが、親の経済的問題から、返還前は無償であったポルトガル語学校に通ってポルトガル語教育を受け、マカエンセとしてのエスニック・アイデンティティを持つようになった者を指す。

このように、「マカエンセは誰か?」という問いに対しては、マカオの歴史を最初から辿ってこなくてはならない。私個人にとって、マカオに出生した以外にポルトガルとのつながりが一切ない「中国人」である第五のケース以外はすべてマカエンセと言えると思う。つまり、祖先にポルトガル人がいるかどうかということには関係なく、もっとも大事なものは、「自分がマカエンセである」というアイデンティティと感情を持っていること、そしてマカエンセとしての文化を継承していることだ。基本的にはポルトガル語を話し、ポルトガルの教育を受けていることが基本であるが、もしマカエンセであるという強いアイデンティティを持ち、料理や生活様式などがマカエンセ文化とつながりがあれば、ポルトガル語が話せずポルトガル教育を受けていなくてもかまわない。

次に、海外に出て行ったディアスポラのマカエンセはどうか。マカオがずっと抱えてきた問題は、人口に対して土地が狭く、就職先がないことだ。だから若者たちはみんな最終的には仕事を求めて海外に出て行った。海外ではマカエンセたちはコミュニティをつくり、カーザ・デ・マカオ (Casa de Macau)⁶⁾ という団体が活動している。第一の世代が子どもをつくり、その子どもたちがマカエンセとしてのアイデンティティを持っていたら、彼らも同様にマカエンセと呼べると自分は思う。

Q2. 返還後8年経った今 (2008年3月時点)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか? また、あなた自身はどうでしたか?

返還前のマカオの黄金時代は、マカオにポルトガル人が駐留し、日本との貿易を盛んにおこなっていたときに遡る。表向き外国と貿易をすることを禁じていた中国と日本との間の中間貿易によって大きな利益を得たのである。その後日本が鎖国し、またアヘン戦争によってイギリス人がマカオより良港である香港に駐留するようになり、マカオは

(6) ポルトガル語で「マカオの家」を意味する。海外在住のマカエンセ・コミュニティの自主組織を指す。

さびれていった。しかしある意味で、香港があることはマカオにとっても良かった。イギリス人は当初マカオにおいていた事務所を香港に移したが、現地の中国人とのやり取りの中で、英語も中国語もできるマカエンセたちは非常に使い勝手がよく、就職口がたくさんあった。こうして、多くのマカエンセたちが香港に移住し、「ポルトガル人コミュニティ」と呼ばれるコミュニティをつくり、今の香港の繁栄を招いたのである。1949年、中国が毛沢東によって共産化すると、上海の経済は悪化し、当時上海に多く滞在していたマカエンセたちはほとんどが香港そしてマカオにも移動した。政治的には中国は諸外国との貿易関係を断ったが、実は香港とマカオを通じて貿易をおこなっていた。こうしてまたマカオには就職難が生じたが、香港でマカエンセのOBが多い香港上海銀行（香港上海滙豐銀行有限公司、HSBC）には、マカオから就職がしやすく、多くの若者たちが高校卒業、もしくは在学中に香港に出て行った。その香港が経済的に下降気味になると、今度はブラジル、オーストラリア、カナダ、米国などがマカエンセの行き先になった。特にブラジルはポルトガル語を話すと言う関係で多くが移民をした。こうして成功した人たちが前述のカーザ・デ・マカオを各地につくり、今でも活動をしている。また、マカエンセ文化のひとつとして重要なマカオ料理は、今まで説明してきたように、さまざまな状況で来澳し、定住し、子どもを生み母親となった色々な国の女性たちの手によって作り出されたものだ。たとえばタイ出身の女性がマカオで結婚し、料理をするとき、自分の国にある食材がないため、それに代わる何かを使って料理を作る。そうやって多種多様な文化が混じったマカオ料理が生まれた。

返還後、私自身は公職になく、自分の個人的な仕事を続けているので仕事上も、また自分自身のアイデンティティもなんら変わっていない。しかし、マカエンセ全体のアイデンティティはどうだろうか。返還前、多くのマカエンセたちがマカオから出ていったが、私はどこにも行かずマカオにとどまり、1999年12月20日の返還に際して行われた記念行事をすべてテレビで見た。ポルトガルの旗が下がり、中国国旗が揚がっていく、それを見守りながら心が痛んだ。

マカオは歴史上、完全にポルトガルの植民地であったことはなく、常に中国が最後には権力を持っていたのだから、ポルトガルは完全な征服者とは言えなかった。それなのに、返還後のマカオでは、一時「愛国者」を名乗る人間たちによって「植民地主義者や征服者たちの痕跡を全て消そう」という活動がしばらく続いた。たとえばポルトガル政府の紋章があらゆる場所から徹底的に拭い去られた。中国語を何より優先し、ポルトガル語を格下げしようとする傾向があった。ポルトガル語と中国語の二ヶ国語で示されている通りの名前の標識は、今まで左半分にポルトガル語、右半分に中国語が示されていたが、返還後、わざわざ「上半分に」中国語を、「下半分に」ポルトガル語を記載したものが作り直された。元来中国語は右から左に書くのが正式なのだから、今までの記載方法で十分はずなのに。また、政府の公報も、今までポルトガル語が左、中国語が右

に並んで書かれていたものを、わざわざ反対の表記に変えられたが、そのほうがずっと見づらくなった。そのほか、今もポルトガル語で書かれている法律を全て中国語表記に代えるべきだ、という論争も起こった。

さらに、公務員の中では、多くのポルトガル人やマカエンセが将来を憂慮して海外に出て行ったが、マカオに残った者の中では今までトップにいたポルトガル人やマカエンセはみな次席に落とされ、中国人に取って代わられた。早期退職に追いやられた者も多い。

しかし、こうしたやや過激なポルトガル語の排除傾向を落ち着かせ、マカオの立場を再認識する行動をとったのは、ほかならぬ中国政府だった。つまり、中国とポルトガル語圏アフリカ諸国間のビジネスをつなぐフォーラムをマカオに開設し⁽⁷⁾、また、マカオの歴史地区をユネスコの世界遺産に認定させるという、二つの点でマカオを際立たせた。それはマカオに住む者にとっては嬉しいことだった。しかし、こうした一連の返還後の動きは、中国語（広東語）を話せるが読み書きはできないマカエンセのコミュニティをじわじわと疎外し、苦しめる傾向につながっていると感じる。

Q3. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

マカオ基本法に基づく現在のマカオは、昔の中国の中華思想を彷彿とさせる。つまり、漢民族による中央政府が、異なる周辺の民族をすべて臣民としてとりこみ、中国人化させようとするメンタリティである。すなわち、「彼らは野蛮人だ、だから中国人にしてやろう」という考え方だ。

マカオ基本法では、行政トップにあたる行政長官は人民による直接選挙ではなく、各業界・団体から選抜された300名の選挙委員によって選ばれる。その委員は中国国籍のマカオ永住権を持った住民でなければならない。そして、近年、マカエンセを代表する団体の会長らが数人、この委員会に招かれ、「ポルトガル国籍を捨てて」中国籍を選んだ。中にはポルトガル生まれのポルトガル人でありながら、中国国籍を選んだ人物もいる。

「マカエンセは中国人なのか？それともポルトガル人なのか？」この問いに今、答えられる者は誰もいない。今の段階で返還後のマカエンセのアイデンティティがどう変わったのか述べることは時期尚早だろう。しかし、こうしたマカエンセ・コミュニティ

(7) 中国・ポルトガル語圏諸国経済通商協力フォーラム（ポルトガル語：Fórum para a Cooperação Económica e Comercial entre a China e os Países de língua portuguesa）を指す。ポルトガル語圏諸国7カ国と中国間の経済協力を目的とする同フォーラムの事務局本部はマカオに置かれ、マカエンセの女性議員がエグゼクティブディレクターとして活躍している（ケース5参照）。

のトップにいる者たちが中国人化することによって、一般のマカエンセたちのアイデンティティも今後変わっていくのではないだろうか。

マカエンセの将来がどうなるのか、私にはわからない。でも、他のマカエンセに聞いてみてほしい。「あなたは、中国人になれますか。中国人になっても、マカエンセとしてのアイデンティティを保っていただけますか?」と。マカエンセのアイデンティティはいったいどこへ行くのか。その答えは、あなた自身に出して欲しい。

〈ケース10〉 K・F (男性・20代後半・一般人)

自分自身は中国人と呼ばれることにある種の抵抗感を抱いており、マカエンセであるというアイデンティティを持ち続けていたい。でも、自分に子どもが生まれたら英語教育の学校に入れると思う。マカエンセとしての教育をするつもりはない。

日本語でのインタビューに応じてくれた異色の人物。筆者がフィールドワーク出発前、ネットサーフィン中に「マカエンセの日々」なる日本語・広東語で書かれたブログに出会い、コンタクトを取ったところ、快く会ってくれた。2008年3月17日夜、妻のNさんと三人でマカオ半島内にあるポルトガル料理レストランで一緒に食事。とても気さくな若い夫婦である。3月25日、マカオ半島内の別のポルトガル料理レストランで再度夕食を共にしながら、インタビューという形をとらず、歓談しながら語ってもらった。Nさんもポルトガル語と日本語を話せるので、両言語が入り混じる面白い会話となった。

インタビュー当時29歳。エクアドル人・中国人のハーフの父親と中国系マカエンセの母親の間に生まれた。一見して完全な中国系の顔立ちだが、写真を見ると西欧的な面影も感じられる。親の希望により中学までポルトガル語教育を受け、教会附属の中学校(ドン・ボスコ・コレジオ)を卒業。当時はポルトガル系の中学校を卒業すれば公務員になることができたため、卒業後すぐに市役所に就職したが、必要性を感じ仕事の傍ら、夜学の中国系高校に進学した。ポルトガル語は中学卒業後現在まで約十年間、日常生活で話すことはほとんどないため、ずいぶん忘れてしまった。ポルトガルに行ったこともない。趣味は日本語で、養成講座に通って日本語検定一級を取得したが、仕事上で使う機会はない。現在は市役所の教育関連部門で調査関係の仕事を担当している。下級職員のため将来の昇進はないと思う。家族は両親と妹が一人。妹は中国語学校に通ったのでポルトガル語はできない。

妻のNさんとはネットを通じて知り合い、四か月前に結婚したばかり。二人とも1981年国籍法制定以前にマカオに生まれたため、出生時はポルトガル国籍で名前もポルトガル

式だった。その後、返還に際して中国政府からはどちらかの国籍を選択するように言われ、中国籍を選んだが、ポルトガルのパスポートも引き続き維持しており、事実上の二重国籍である。Nさんは27歳、ピアノ講師。父方の祖母はポルトガル系のマカエンセ、母親は香港人。弟が一人。母親に似ているという言葉通り、顔立ちにポルトガル人の面影はない。親の希望でポルトガル系の小・中・高校に進んだが、高校を中退。その後、語学学校で中国語を学び、今は広東語・中国語が生活言語となり、英語も話せる。近い将来、マカオの大学に進学して音楽の学位を取得したいと思っている。夫同様、日常生活でポルトガル語を話すことはほとんどないが、ポルトガル人子女にピアノを教える際に使っている。ポルトガル語ができるピアノ講師は非常に少ないので、ポルトガル語を経験に活かしていきたいと思っている。日本語も独学で勉強して、少しはわかる。父親が家を持っているため、ポルトガルに何度か行ったことはあるが、自分には夫ほどマカエンセとしてのアイデンティティにこだわる気持ちはない。自分は中国人だと思うし、そう呼ばれることにも特に抵抗はない。自分の子供には、将来を考えて中国語の教育を受けさせたいと思う。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

一般的にはポルトガル人の血が入っている人のことをマカエンセと呼ぶのだと思うが、自分としては、マカオ生まれで、マカエンセとしてのアイデンティティを持っている人間は「マカエンセ」と呼べると思う。そして、「マカオ人」という範疇からは、「1980年代前半に大陸から身分証明書なしに密入国した中国人の子どもたちで、政府の温情によりマカオ籍を取得した人たち」と、「返還後のマカオで、多額の投資と引き換えにマカオ籍を取得した大陸の中国人」の二者を外したい。

Q2. 返還後8年を経た今(2008年3月時点)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

返還後、政府は表向き、マカオ住民に対して「愛国愛澳(国を愛しマカオを愛する)」というスローガンを繰り返してはいるが、実際、マカエンセは中国人化する方向にある。中国籍を取り、中国語を話し、特にマカエンセであることを意識しない現在の生活の中で、「自分はマカエンセだ」と言っても、外国人からは中国人として見られ、周囲の友人達もみな中国人と呼ばれることに抵抗はないようだ。しかし、自分は中国人と呼ばれることに一種の抵抗感を抱いている。表面上はその動きに身を任せても、心の

中ではマカエンセであるというアイデンティティを持ち続けていたい。

Q3. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

ポルトガル人がマカオから去った今、マカエンセもいつかはいなくなるだろう。自分に子どもが生まれたら、今後の必要性を考えて英語教育の学校に入れると思う。特にマカエンセとしての教育をするつもりはない。日々変化が激しいマカオでは、確かに以前より生活は向上したかもしれないが、自分は返還前ののんびりした「植民地時代」にノスタルジーを感じる。特にQ1.で述べた大陸の中国人が大量にマカオに入ってきてから、マナーの悪い住民が多くなった。マカオに生まれ育った地元民を大切にしない現在の政府には不満がある。また、現在急増しているカジノでは、中卒で一般人の倍の給料を得ることができるため、中学卒業後、就職の規定年齢に達するまで定職に就かず、その後ディーラーになる者が多くなった。カジノの仕事は全体的に収入が良いので、教師や医学部の学生たちが、より高い給料に魅力を感じてカジノに転職してしまうケースも多い。今後、教育や医療に携わる人材が減少するとともに、バブルがはじけて大量のリストラが始まり、フィリピンや大陸の中国人たちが安い給料で働くようになると、大変な社会混乱を招くことになるだろう。現在、バブルで地価は以前の倍以上にはねあがり、家を買うことは不可能に近い。このほか、若者の間でも非行やいじめが目立つようになった。こうした社会情勢を自分は憂慮している。

<ケース11> A・F (男性・60代前半・一般人)

マカエンセとそのアイデンティティの未来について、個人的にはあまり楽観的ではない。マカエンセは日々変わっていく情勢に自分を適応させ、生活様式もポルトガル式から中国式に変わってきている。マカエンセとしてのアイデンティティも、若い世代の中では薄まってきている。

ケース17の日本在住マカエンセA・K氏の高校時代からの旧友。ポルトガルの国債銀行として19世紀後半に設立されたカイシャ・ジェラル・デ・デポジット (Caixa Geral de Depósitos) 系列の銀行であり、旧ポルトガル植民地の国々に支店を持つ大西洋銀行 (Banco Nacional Ultramarino) 本店に勤務。現在の職務は個人貸付部門マネージャー。3月20日午後、マカオ半島のまさに中心部にあたる大西洋銀行本店内で、同じくA・K氏の旧友で同僚のJ・F氏の個人オフィスで一時間半にわたりゆっくり語ってくれた。二人で一緒にということであったが、J・F氏はほとんど意見を述べず、基本的にA・F氏の話

に終始した。

インタビュー当時62歳。ふさふさした艶のあるやや長髪の黒髪で、表情も常に穏やか、年齢よりずっと若々しい。明らかにポルトガル人の血をひいていることがわかる風貌。父親はポルトガル人で兵役のため来澳後、定住して警察官となり、23歳のとき、当時18歳だったマカエンセの母親と結婚。三男一女に恵まれ、自分以外のきょうだいはポルトガルとベルギーに在住。母は92歳でまだ健在である。家族はマカエンセの妻と息子がひとり。自分も二十代前半で結婚し子どもをもうけたので、もうすぐ40歳を迎える息子には十代後半の孫がいる。

自分が幼少の頃、海外で勤務するポルトガル人公務員は四年に一度ポルトガルでの休暇が与えられていたので、自分も乳児期と12歳のときに（家族とともに）ポルトガルに行き、二年間ポルトガルの学校に通った。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

第二次大戦半ば頃のマカエンセとは「マカオ生まれであり、ポルトガルの教育を受けた者」のことを指していた。大戦中は上海や香港に住んでいたポルトガル人が大量に中立を守っていたマカオに流れ込んできたが、彼らは「マカエンセ」と呼ばれるのを嫌い、自分達とは距離を置いていた。上海出身のポルトガル人は英語に精通しており、結局大戦終了後はアメリカに移住していった。1960年代後半、政情が不安になり、人口も少なく就職口もなかったマカオでは、多くの若者たちが香港、ブラジル、アメリカなどの海外に出ていき、そのまま帰ってこなかった。香港では、上海・香港からの海外脱出組を大戦中に受け入れた歴史的背景から、マカオ商業高校を出た者に対して香港上海銀行が門戸を開いた。私は同高校を卒業後、ポルトガル人として兵役についたが、場所は幸運なことにアフリカの旧ポルトガル植民地ではなく、ここマカオだった。

Q2. 返還後8年経った今（2008年3月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

その質問には、「変わった」「変わらざるを得なかった」と答えるだろう。体制移行前、ポルトガル政府はマカエンセに対して引継ぎや準備をしなかった。別の言い方をすれば、ポルトガル政府は、中国政府が返還後にこれほどマカエンセに対して好意的態度を示してくれるとは予想していなかった。つまり、ポルトガル政府は、返還に際してマカエンセが皆、国外に脱出するだろうと思っていたため、十分な引き継ぎをしなかったといっ

でも良いだろう。返還前、ポルトガル政府は公務員に対し早期退職希望者には退職金を支給し、ポルトガルに「帰国」したい者には本国における同等のポストも約束した。こうした態度は逆に「返還後のマカオには自分達の居場所はなくなるかもしれない」という危機感をマカエンセに与え、多くの者が早期退職ないしポルトガルへの「帰国」を選んだ。結局、早期退職者の中には持っていた資産を使い切ってしまうと現在職を失い困っているケースや、ポルトガルに「帰国」したが希望通りの仕事を与えられず問題を抱えているケースが多数ある。さらに退職していったマカエンセのポストに、果たして適材適所の人材が割り振られたかどうかは疑問である。今の状況は悪くはないが、もっと良くなれたはずだ。今のマカオ社会に私が不足していると思うのは病院と、老人と身体障害者のための養護施設だ。

返還の前後で自分のアイデンティティが変わったかという質問に関しては、自分自身は全く変わっていない。それは、私が働いているのがポルトガル系銀行で、国際的な展開をしているためだ。この銀行に37年間勤務しているが、初めからマカエンセに対する差別もない。公務員社会では、返還に際して上司がポルトガル人から経験の浅い中国人に代わり、仕事に影響を及ぼす事態もあったが、自分の職場ではそのようなことはなかった。

Q3. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

個人的にはあまり楽観的ではない。現代のマカオ社会では、マカエンセが昔のようにマカエンセ同士で結婚するのではなく、中国人や他の国籍の人たちと結婚し、ポルトガル文化を失いつつある。ポルトガル語学校は現在一校に減ってしまった。将来もしポルトガル語学校がインターナショナルスクールのような形態に変わってしまったら、ポルトガル文化は伝えられなくなっていくだろう。

中国政府がポルトガル語やマカエンセを排除しようとしているのではない。職場において、上に立つ者が中国人であるため、中国語ができる部下を選ぶのだ。逆に中国政府はマカエンセの立場を守り、マカエンセの組織に助成を行っている。だから中国に対して文句はない。中国の支配下になった以上、中国語ができることが新しい世代にとって一番大事になる。良い職業を得るためには中国語ができなくてはいけない。中国人との結婚により生活様式も中国式になる。しかしポルトガル語が消え去ったわけではない。今でも法律はポルトガルの法律に沿っており、条文もポルトガル語で書かれている。これは2049年まで続く。その後どうなるかはわからないが、中国そのものがその間に大きく変わることも考えられる。

今後、生活の面ではマカエンセの将来は心配ないだろう。しかしマカエンセとしてのアイデンティティは、若い世代の中では薄まってきている。彼らは日々変わっていく情

勢に自分を適応させ、生活様式も西洋式 (ポルトガル式) から東洋式 (中国式) に変わってきている。

ポルトガルでは教育制度の中でマカオについて教えてこなかった。私自身が12歳から二年間ポルトガルに暮らした時、「中国人だ」と指差されて (差別され)、中国人ではなくマカオ出身だと言っても「それはどこにあるのか?」とまったく理解してもらえなかった。海外に移住したマカエンセたちは、移住先で非常にうまく適応したため、マカオに帰ってこない者が多い。しかし逆に、彼らは古き良き時代のマカオを懐かしく思っているのだ。現在のマカオを見るとショックを受けるようだ。教育にしても返還前まではポルトガル語学校は学費が無償で中国語学校は有料であったが、返還後は立場が逆になった。(中国返還が一般に告知されたのは) 突然のことだったので、返還前に卒業年次に達しない子どもはポルトガル語学校に通い続けるしかなく、学費を払えずに困る家庭もあった。現在は、政府がかなりのパーセンテージでポルトガル語学校もサポートしてくれている。ちなみに、私の孫は中国・ポルトガル語学校 (中葡学校) に通っている。

Q4. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」(ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり) を感じますか?

自分はポルトガルにいる兄弟をよく訪問するし、特にサッカーなどのスポーツを通してポルトガルを応援している。現在、マカエンセでマカオ政府の中で最もトップにいるレオネル・アルヴェス (Leonel Alves) は私の高校出身である。彼は二重国籍を認めない中国政府で政治活動を行うために、ポルトガル国籍を捨てて中国籍を取得した。といってもポルトガルは二重国籍を許可しているので、国籍を捨てたといっても事実上はそうでもないのかもしれない。

マカエンセの言葉であるパトゥア語⁽⁸⁾は我々マカエンセの間で話されていた。マラッカ、シンガポールの言葉が混じった言葉である。私が若いときには、進学する学校が金持ちの家族の子どもは普通高校 (リセウ)⁽⁹⁾、一般庶民の子どもは商業高校と分けられていた。実は私の家は裕福なほうだったが、通った小学校が商業高校の系統だったので、そのまま商業高校に通った。商業学校では学食も無料で提供していた。

(8) ポルトガル語の表記はPatuá, Patoá, Patoisなど複数。ポルトガル語を土台として多様な言語の語彙と体系を持つクレオール語として、マカエンセと一部のマカオ在住の中国人を中心としたコミュニティ間の話し言葉として受け継がれてきた。しかし、19世紀後半からポルトガル語教育が一般化することによって次第に話されなくなり、20世紀初頭以降はほとんど耳にすることはなくなっている。

(9) ポルトガル本国で用いられていた、「普通中学・高校」の通称を表すポルトガル語 (liceu)。

マカオがどんなに変貌を遂げてきたかは、今の世代の者にはわからない。ずっと昔から住んでおり、父親から昔のことをよく聞いて育った、自分のような人間でないといけないと思う。

〈ケース12〉 D・C (男性・20代後半・一般人)

マカエンセのエスニック・アイデンティティは今後消えてゆくだろう。自分のようにマカエンセであることを自覚し重視する若い世代はどんどん少なくなっていくからだ。こうしたマイノリティ文化を守っていかなければならないと思うが、実際、そのために何か行動を起こしているわけではない。自分の子どもが生まれても、特にマカエンセであることを強調して育てるつもりはない。

ポルトガル語教育を受けずに育ち、「ポルトガル語が話せない」まさに現代のマカエンセを代表する二十代の貴重なインフォーマントである。インタビュー当時27歳。マカオ半島にある観光ホテル専門学校（中国語：旅遊學院，ポルトガル語：Instituto de Formação Turística）で講師を務めている。父方の祖父はマカエンセ，祖母は中国人とメキシコ人のハーフで，両親はマカエンセ。父親はメキシコ生まれで，マカオに来て母親と知り合い結婚し，自分が生まれた。幼稚園から高校までマカオの英語学校で学び，卒業後はイギリスの大学・大学院で観光学を専攻。卒業後，マカオに戻り現在の職業を得ながら博士号取得を目指している。両親もマカオ在住。ポルトガル語は家で両親が話しているので，理解はできるし少しは話せるが，教育を受けていないので読み書きはできない。また，広東語も普通に会話はできるが読み書きはできない。インタビューは2008年3月21日午後，マカオ半島のジェットフォイル出着場に隣接するショッピングモール内のコーヒーショップで，英語で行った。

がっちりした体型で，一見して中国系よりも，欧米系の風貌が目立つ。しかし留学したイギリスや，叔父夫婦が住んでいたポルトガルでは盛んに中国人的な風貌を指摘されたという。とても明るく社交的。筆者のフィールドワーク中に，ある人物から間接的に紹介され，突然のインタビューとなったのにもかかわらず，会うなり人なつこい笑顔をかべて積極的に話してくれた。インタビュー中に，同じくマカエンセだという同世代の恋人が合流。彼女は完全な中国系の顔立ちで，インフォーマント同様英語教育を受けて育ったため，親はポルトガル語を話せるが自分はまったく話せない。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

自分にとってのマカエンセとは、マカオ生まれで、ポルトガル人と中国人の血をひき、さらに数世代前（せめて祖父母の時代）からマカオに根を張っている人間を指す。ポルトガル語教育を受けたか否かに関しては、関係ない。実際、自分はポルトガル語学校に通わず、英語教育を受けて育ち、ポルトガル語はあまりできないが、マカエンセであると自覚し、誇りを持ち、かつ幸せに感じている。幼少の頃、家族の会話はポルトガル語で、生活様式もポルトガル式だったが、もちろん中国の影響もあった。たとえば、ポルトガル人が好んで食べるフライドポテトやマンゴーは、中国の食生活の中では子どもには良くない「熱い、冷たい食品」であると考えられていたため、我が家の食卓に並ぶことはなかった。中華料理は大好きだが、マカオ風に味付けしたもののほうが好きだ。

イギリス在学中、自分は周囲には中国人だと思われていた。休暇でポルトガル在住の叔父宅に遊びに行ったときにも、何人ものポルトガル人に中国人と呼ばれ、「自分はマカオから来た」と説明しても理解してもらえないことが多かった。イギリスでニュージーランドに住むマイノリティであるマオリのことを学んで以降、自分も同じくマイノリティのマカエンセであることを自覚し、マカオ料理やパトゥア語といった伝統を守っていくことの大切さを痛感するようになった。とは言え、自分はマカエンセ関連の行事にはほとんど参加しない。昨年、パトゥア語の演劇作品を見に行ったが、まったく理解できず、字幕もポルトガル語なので途中で退席してしまった。ポルトガル語を学ぼうとは思わない。理由は、あまり意味があると思えないから。たとえ他の初心者にくらべてずっと上達が早いとしても、その時間があれば中国語を勉強するか、もしくは自分の研究に費やしたい。

Q2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」（ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり）を感じますか？

自分の国籍はポルトガルだが、イギリスで「あなたは何国人か」と聞かれたとき、「マカオ人」「中国人」と答えたことはあっても、「ポルトガル人」と答えたことはない。このメンタリティは、年代ではなく、ポルトガル語学校に通ったか否かに影響すると思う。たとえば、ポルトガル語学校に高校まで通った自分と同年の従妹は、「自分はポルトガル人だ」と言っている。

Q3. 返還後8年経った今（2008年3月時点）、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうで

したか？

返還の前後で、自分のアイデンティティに何か変化があったとは思わない。ずっと同じ。返還の日、イギリスの大学に在籍中だった自分は、ポルトガル在住の叔父夫婦宅で休暇を過ごしていた。テレビを見ながら、ポルトガル国旗が下がり、代わって中国国旗が掲揚されるシーンではわくわくした気持ちで見守っていたが、叔父夫婦は寂しいと言って見ようとしなかった。

Q4. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

マカエンセのエスニック・アイデンティティは多分、今後消えてゆくだろう。自分のようにマカエンセであることを自覚し、マカエンセを重視する若い世代がどんどん少なくなっていくからだ。「ただの混血」であるといわれる日がいつか来るだろう。自分はこうしたマイノリティの文化を守っていかなければならないと言ったが、実際のところ何か行動を起こしているわけではない。たとえば自分が将来結婚して、子どもができた時、とくにマカエンセであることを強調して育てるつもりはない。自分の政治的立場は中立だが、生活様式や考え方はどちらかというと中国のほうに近い。ただし、サッカーを応援するときは中国でなくポルトガル側につく。

〈ケース13〉 P・L (男性・30代後半・一般人)

マカエンセの文化は中国化し、ポルトガルの・マカオ的な要素を失ってきている。これは悲観的な見方ではなく、現実的な見方である。なぜなら、中国人の中に、マカオとのつながり、マカオへの帰属性を感じるものはないから。このままだとマカオはただの中国のひとつの観光地になってしまうだろう。

2008年3月25日午後、ポルトガル外務省の外郭団体の下部組織で、アジアにおけるポルトガル文化とポルトガル語教育の推進活動を行っている東洋ポルトガル・インスティテュート（中国語：東方葡萄牙學會、ポルトガル語：IPOR-Instituto Português do Oriente）内のカフェテリアでインタビュー実施。

インタビュー当時38歳。今回のインフォーマントの中で唯一の「自称マカエンセ」のポルトガル人である。ポルトガル生まれだが、ポルトガル旧植民地のアンゴラに長く暮らした後、(理由は不明だが) 13年前からマカオで生活している。通算するとポルトガルよりもマカオでの生活が長くなった。家族も全員マカオで生活している。妻もポルトガ

ル人だが、マカオでの生活は12年と長い。確かに一般的なポルトガル人とは雰囲気は異なり、マカエンセだと言われても納得できる風貌である。

現在、在マカオポルトガル人協会代表委員、在マカオ・アンゴラ人協会会長を兼任しながら、返還後マカオに1校だけ残っているポルトガル語学校 (Escola Portuguesa) で教師を務め、コンピュータ関連の授業を持っている。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

アジア系の血とポルトガル人の血を両方受け継ぐ人、というのがもっとも伝統的なマカエンセの定義だが、私はそうした血のつながりは絶対条件ではなく、自分のマカオに対するビジョン、すなわちマカオに対する深いつながりが自分の中にあれば、その人もマカエンセの一人といえると思う。自分がその例だ。私は自分をポルトガル人ではなく、マカエンセだと思っている。旧正月を祝うなど、中国的な文化も生活の中にあり、中国人の友人も多い。マカエンセの中でも、とくに近年ポルトガル人の血を受け継ぐ人の数は非常に少なくなってきた。生活様式もどんどん中国式に変わってきている。たとえばポルトガル料理よりも中華料理を食べることが多くなってきた。

Q2. 出自はポルトガル人の血を引くが、英語もしくは中国語の教育を受けて育ち、ポルトガル語ができない今の若い世代たちもまたマカエンセと呼べるでしょうか？

そういった人たちも、家庭の中ではポルトガル的な文化・伝統を守っている場合が多いので、マカエンセと呼べるだろう。逆にまったくポルトガル人の血を引かない中国系でも、ポルトガル語教育を受けていればマカエンセと呼べるだろう。もっとも基本的な条件だけでマカエンセの定義を決めると、次世代にはマカエンセと呼べる人はいなくなってしまう。キリスト教徒 (カトリック) であることは大切だろう。マカオの伝統文化はキリスト教と深くつながっているから。ポルトガルの文化を受けていることが、出自よりも大切といえるだろう。

ポルトガル語学校に通う学生の数は減り続けている。現在同校生徒の大多数はマカエンセか中国人だ。親や祖父母がポルトガル語教育を受けていたので子どもたちに同様の教育を受けさせたいと希望して通学させる場合が多い。子どもたちは学校の中でしかポルトガル語を話さないことが多いため、きちんと勉強しない生徒が多いが、返還以降、ポルトガル語を学習したいという中国人が増え、ポルトガル語がマカエンセよりも正確にできる者も多い。ポルトガル語学校では返還前は完全にポルトガルの学校と同じカリキュラムを組んでいた。以前はマカオに関する科目もなかったが、現在はマカオの歴

史・文化・文学の科目がある。中国語を一年生から最終学年まで必修科目としているが、十分ではない。日常生活では広東語だけで北京語はあまり使われないため、北京語を習わせることに抵抗を感じる生徒の親もいる。ポルトガル語の幼稚園もポルトガル式の教育カリキュラムを採っているが、学費が中・高等学校よりも高いので、入学者の数は減り続けている。こうした教育戦略は非常に良くないと思う。

Q 3. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

現在マカエンセの組織を支えているのは50～60代の歳をとった世代ばかりで、若い世代への引継ぎがなされていない。マカエンセの中で世代が若くなるにしたがって、ポルトガル人との血のつながりがなくなるとともに中国人との結びつきが強くなり、生活が中国化していけば、数十年間のうちにマカエンセの中から西洋的なものが消え、中国的なものが多くなっていくだろう。その傾向は返還前からあったが、返還後とくに強くなった。現在、パトゥア語¹⁰⁾講座も開設され、伝統を守る動きも出てきてはいるが、全体的にはマカエンセ文化は中国化し、ポルトガルの、マカオ的な文化を失ってきている。これは悲観的な見方ではなく、現実的な見方である。なぜなら、中国人の中に、マカオとのつながり、マカオへの帰属性を感じるものはないから。このままだとマカオはただの中国のひとつの観光地になってしまうだろう。

返還後、公的な場では中国語が必要になる。ポルトガル語学校の学生も中国語を修得することが大切だ。マカオに住む者は中国語ができなくてはだめだ。そしてビジネスのためには英語も必要だ。若者たちはその現実を目を開かなくてはいけない。新しい世代は、言語を習得することによって、新しい世界を開けるはずだ。

返還後の情勢不安を懸念して国外に出て行ったマカエンセのうち、20～30代の若者たちの多くが結局海外の生活になじめず、平和なマカオの状況を知って帰ってきている。独特のマカオ文化になじむと海外に行っても適応することができず、「マカオが自分のホームグラウンドだ」と言って戻ってくる人も多い。若者がマカオに戻ってくるのは良い傾向だと思う。

〈ケース14〉 S・R (男性・60代後半・一般人)

マカエンセは国籍ではない。自分自身がマカエンセであるというアイデンティティを持っており、なんらかの形でマカオとつながっている者はみなマ

(10) 注8参照。

カエンセである。マカオ料理やパトゥア語⁽¹¹⁾といったマカエンセの独特な文化をはじめ、マカエンセとしてのアイデンティティを若い世代の人たちに伝え、継続してもらうために自分は一生懸命努力している。

2008年3月25日午後、マカエンセの教育・文化関連団体のひとつであるマカエンセ教育推進協会（中国語：澳門土生教育協進會，ポルトガル語：APIM - Associação Promotora da Instrução dos Macaenses）の事務局でインタビューを実施した。事務局はマカオ半島の中心部からはやや離れた場所に位置する。

インタビュー当時67歳。同協会の会長秘書としてボランティアで勤務している。風貌は完全な中国系。父はマカエンセ、母は中国人。二人とも敬虔なクリスチャン。旧家のマカエンセ・ファミリーの代々の家系図を詳細に記録した三巻にわたる紳士録『マカエンセ・ファミリー』⁽¹²⁾にも記載されているほど昔からマカオに住んでいる。11人兄弟で、家族は世界中に散らばっている。家族は中国人の妻との間に四人の子どもがいるが、現在全員が海外に住んでいる。高校までマカオの神学校に通い、兵役についたあと司法警察に所属、その間研修でポルトガルに何度も行っている。13年間インターポール（国際刑事警察機構）で働き、担当部長の役職を最後に、1998年に38年間の現役生活を終えた。

幼少の頃、家庭内で話されていた言葉はポルトガル語。ポルトガル語教育を受け、自分の母国語はポルトガル語だが、英語も堪能。中国語は会話と読みはできるが書くことはできない。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

まず、マカエンセは国籍ではない。自分自身がマカエンセであるというアイデンティティを持っており、なんらかの形でマカオとつながっている者はみなマカエンセである。マカオ生まれであること、ポルトガル教育を受けていること、ポルトガル語を話すことは重要なファクターのひとつではあるが、絶対条件ではない。

Q2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」（ポルトガルの精神的な精神性や価値観、ポルトガルとのつながり）を感じますか？

非常に感じる。兄弟や子どもも数人ポルトガルに住んでいてよく行くし、ポルトガル

(11) 注8参照。

(12) Forjaz, Jorge: *Famílias Macaenses, Volume I, II, III*. Macau: Fundação Oriente (1996).

のニュース番組も毎日見る。サッカーもポルトガルのチーム、ベンフィカのファン。ポルトガル文化にも親しみを感じる。自分の風貌は完全な中国系だが、中国人としてのアイデンティティはまったくない。

Q 3. 返還後8年経った今(2008年3月現在)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

全体的にも、また個人的にもあまり変わっていないと思う。自分は返還前にすでに引退していたのでよけいにそう思うのかもしれない。マカエンセは昔も今も、(ポルトガル人と中国人の間の) 連携役として機能してきた。返還前はポルトガルと中国の間を取り持ってきたし、返還後は中国とポルトガル語圏諸国との間の連携役となっている。

もちろん生活に常に変化はつきまとうものだ。とくに返還後の今は、マカエンセは中国語を修得する必要がある。

Q 4. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

マカオ料理やパトゥア語(自分の年代は、結構話す人がいる)といったマカエンセの独特な文化をはじめ、マカエンセとしてのアイデンティティを若い世代の人たちに伝え、継続してもらうために自分は一生懸命努力している。三年に一度マカエンセ教育推進協会が実施している会合に集まるのは年寄り達が多いが、今回は世界の12か所のカーザ・デ・マカオ⁽³⁾から二名ずつ若者を招待したほか、海外在住のマカエンセの子どもたちが多数参加し、マカオに住むマカエンセの若者たちと一緒に非常に活発なやりとりが行なわれた。パトゥア語は現在ユネスコの無形遺産登録に向けて推進活動をおこなっている。こうした努力を通して、若者たちがマカエンセとしてのアイデンティティと文化を継承してくれることを祈っている。

〈ケース15〉D・C(男性・40代後半・一般人)

マカエンセの未来については、正直わからない。中国語を修得していない場合は、公務員の仕事につくことは難しくなるかもしれないが、現在は民間企業への就職も可能なので、その意味ではそれなりに未来は明るいのではないか。

(13) 注6参照。

2008年3月26日午後、マカオ半島中心部にあるオフィスの執務室でインタビューを実施。インタビュー当時47歳。ケース9のM・B氏の知人（ポルトガル人）から紹介を受ける。マカオ市役所（中国語：民政總署，ポルトガル語：Instituto para os Assuntos Cívicos e Municipais, 返還前の名称はLeal Senado)¹⁴⁾に勤務する。現在の肩書きは建築設備部部长。

顔立ちは中国系で、ポルトガル系の面影は全くない。細身で几帳面そうな雰囲気。祖父母、両親もマカオ出身。姉妹が二人。母親側の祖先にはポルトガル人もいと聞いているが、明確ではないので家系の出自に関する話題はあまり話したくない。母親はポルトガル語、父親は中国語と英語の教育を受けて育っている。幼少の頃、家では中国語とポルトガル語を話していたが、どちらかといえば中国語のほうが多かった。母親側の祖父はポルトガル語を話すほうが多かった。生活様式は中国式・ポルトガル式の折衷。両親、姉妹ともにキリスト教徒。教育はすべてポルトガル語で受けたので、自分にとっての母語はポルトガル語。中国語は中学校と専門学校で学び、読み書きとにもできる。小学校卒業後、リセウ¹⁵⁾に入学した。卒業後、1978年に市役所臨時職員として市役所に入所したが、実際に勤務することなく1980年リスボンの高等工学院 (Instituto Superior Técnico) に進学して土木工学を学んだ。四年後にマカオに戻り、市役所の職員となり20数年になる。公務のほか、90年代マカオの高校で二年間数学を教えた。

現在の家族構成はマカエンセの妻と二人、子どもはいない。妻も教育環境はすべてポルトガル語だった。現在の生活様式は中国式との折衷。家庭では中国語とポルトガル語で話しているが、日常生活ではほとんどポルトガル語は使わない。自分自身はポルトガル語・中国語・英語を使える。フランス語も大好きで五年間勉強したが、マカオではほとんど使うことはない。日本語やイタリア語も勉強してみたい。少年時代、日本映画が大好きだった。最近は韓国のものが多い。日本にはいつか行ってみたい。

ポルトガル語の環境に生まれ育ち、母語はポルトガル語とのことだったが、今回インタビューした他のマカエンセとは雰囲気が異なり非常に保守的な印象を受けた。投げかけた質問にもあまり直球の返答がなく、本意を語ってくれていないような印象があった。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

出自（ポルトガル人の血を引く）と文化面（ポルトガルの教育を受け、ポルトガル語

(14) かつてマカオはマカオ半島とタイパ島・コロアネ島の二つの行政区に分かれ、二つの市役所があった。マカオ基本法により、返還後はひとつにまとめられ、現在の「民政総署」となった。政治的権限がなくなった以外、以前と業務自体は変わっていない。

(15) 注9参照。

を話すこと)が基本となるだろう。マカオ生まれかどうかは関係ない。しかし中国人でもポルトガル語教育を受け、マカオ文化の中で育っていればマカエンセといえるだろう。また、ポルトガル人でもマカオに根づき長年暮らし、自らをマカエンセと考えている人はマカエンセと呼べるだろう。

Q2. ポルトガル系であっても英語、もしくは中国語の教育を受けて育ち、ポルトガル語ができない今の若い世代たちもまたマカエンセと呼べるでしょうか？

マカエンセの家系に生まれ、マカエンセ文化に触れていれば、ポルトガル語が必須条件とはいえないだろう。

Q3. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」(ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり)を感じますか？

ポルトガルに五年間住んだので、大きな親しみは感じる。

Q4. 返還後8年経った今(2008年3月時点)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

自分自身の生活には何の変化もない。公務員としての仕事上、ポルトガル語を話すことが少なくなったことぐらいだ。仕事上、返還前後に異動などの不穏な動きはなく、非常に安定した返還だったと思う。1987年の中ポ共同宣言以降12年間の移行期間が設けられ、現地化が進められてくる中、ポルトガル人から中国人へのトップ層の引き継ぎはスムーズに進んだし、返還を機にすべてのポルトガル人がいなくなったというわけではない。特に法律関係では現在も多くポルトガル人が職務についている。自分は特別職として返還前から現在のポストについているため、返還を機に失職することという事はなかった。

Q5. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどうなると思いますか？

正直、わからない。(中国語を修得していない場合は)中国語が重視される公務員の仕事につくことは難しくなるかもしれないが、現在は民間企業への就職も可能なので、その意味ではそれなりに未来は明るいのではないかと。次々とカジノが建設されている状況には不安があるが、一般的な社会状況としては問題ないと思う。自分自身の将来には

不安はない。

〈ケース16〉 M・G (女性・50代後半・一般人)

新しい世代にマカエンセとしての文化や伝統を守ろうという意識やマカエンセとしてのアイデンティティが薄れているため、文化はどんどん消えていくだろう。でも、マカエンセという人間が存在しているかぎり、ゼロにはなることはないと思う。

2008年3月27日、タイパ島のポルトガル料理レストランで食事をとりながらインタビューを実施。その後、現在ボランティア活動をしている教会の居間でお話を伺った。

インタビュー当時56歳。独身。マカオに生まれ育ち、全教育をマカオで受けたあと、ポルトガル語小学校の教師、またある中葡学校の校長として29年間教職についていた。体調を崩したことをきっかけに1998年に早期退職し、現在は年金生活。といっても引退後八ヶ月を過ごした後、何もしないことに耐えられなくなり、タイパ島にある教会でボランティア活動をはじめ、毎日教会で仕事をしている。旅行でポルトガルや日本を含む外国に行ったことはあるが、基本的にここマカオに根を張って生活している。

父方、母方ともに祖父がポルトガル人。父方はポルトガル領マデイラ島、母方は北部出身。母方の祖母は富裕層の家庭出身の中国人で66年文革のときにマカオに逃げてきた。父方の祖母はマカエンセ。自分は男三人、女三人の計六人兄弟の三番目。二人をのぞいて全員がマカオにいる。一番上の姉がケース17の日本在住マカエンセA・K氏と学校の同級生。一番上の姉はカナダのトロントにも家を持っていてマカオと行き来している。母国語はポルトガル語で、広東語の会話は普通にできるが、読み書きはできない。マカエンセのほとんどが自分と同じだと思う。

人柄のよい校長先生として慕われたであろうことがすぐに見て取れるような、穏やかでやさしい雰囲気にも包まれた人物。ふっくらした体型で、風貌はポルトガル人の血を引いていることがすぐにわかる顔立ちである。

Q 1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

何より大事なのは、自分がマカエンセであることを強く認識し、マカオ文化を自分の中に感じていること。この強い思いを感じている人にだけわかる感情で、それを持っていない人には説明しがたい。このマカエンセであるというアイデンティティがあれば、マカオ生まれでなくても、ポルトガル人の血をひいてなくても、ポルトガル語の教育を受けていなくてもかまわないと思う。ポルトガル語を話せない人はマカエンセとしては

少し外れるように思うが、ディアスポラの世代の子どもたちや、マカオにいても新しい世代の子どもたちはポルトガル語を話せない人も多いので、家族がマカオ文化を継承していればやはりマカエンセだと言えるだろう。

Q2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」(ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり)を感じますか？

非常に強く感じる。自分は「ポルトガル人」であることに誇りを持っている。返還後、ポルトガル国籍のままだと中国本土に行くときにはビザが必要になってしまうが、中国国籍を取ろうとは思わない。なぜなら、自分はポルトガル国籍を持って生まれ、それが自分のアイデンティティの一部となっているからだ。いまさら変えようとは思わない。

自分にとって、マカオは根を張る場所であり、ポルトガルは祖国だ。私たちの文化は非常に特別だ。ポルトガルと中国、そして他のアジア諸国の文化がミックスされて、生活様式、言葉(パトゥア語)⁽⁶⁾など独特な文化をもっている。わたしの祖母はパトゥア語を話していた。私たちはヨーロッパ式にクリスマスも祝うし、中国正月も祝う。料理もさまざまな国のミックスだ。たとえばマカオ料理に、tacho(タシヨ)という料理がある。ポルトガル料理の煮込み料理と非常に良く似た料理だが、一部の材料(チョリソー)をマカオの食材に変え、またポルトガルでは食べない豚の耳を加えてできあがったもの。今日食べているこのチキン(メニュー上は“ポルトガル風チキン”)もそうだ。元来のポルトガルのシチューに、ポルトガルにはないココナッツが入っている。

Q3. 返還後8年経った今(2008年3月現在)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？ また、あなた自身はどうでしたか？

社会的生活としては、返還一年前にすでに引退していたので、自分としては特に変わったところはない。まだ現役の友人たちの話を聞くと、職場で中国人から、「今までは命令される立場だったが、これからは我々が命令する番だ」と言われて差別を受けている人も多いらしい。返還前に将来を憂慮して多くのマカエンセが海外に脱出したが、自分もポルトガルで年金生活を送ろうかと思って2000年にポルトガルに行ってみた。しかし、結局マカオへの愛着を捨てることができず、数ヶ月で戻ってきた。1999年12月19日の返還の日、数人のマカエンセの友人たちと集まり、テレビでセレモニーを見ていた。ポルトガルの旗が下がり、中国の旗が上がっていく、そのシーンを見てとても悲しくな

(6) 注8参照。

り涙があふれた。ふと周囲を見ると、皆泣いていた。このとき、自分がじぶんのふるさとで外国人になってしまうという現実を痛切に感じ、自分のアイデンティティの中から何かを失ったような気がした。(筆者注：辛い思い出なのだろう、涙ぐんでいた。)

Q4. マカエンセとそのアイデンティティの未来はどのようなと思いますか？

新しい世代にマカエンセとしての文化や伝統を守ろうという意識やマカエンセとしてのアイデンティティが薄れているため、文化はどんどん消えていくだろう。でも、マカエンセという人間が存在しているかぎり、ゼロにはなることはないと思う。

2) ディアスポラ (日本在住) のマカエンセへのインタビュー

〈ケース17〉 A・K (男性・推定60代前半・一般人)

ポルトガル大使館に勤務する筆者の夫の同僚から、「日本に生活しているおそらく唯一のマカエンセ」として紹介された。2007年11月ごろから、都内で数回にわたり会い、その都度少しずつ話をしてくれた。ディアスポラのマカエンセ。60代前半(推定)、日本人の父、中国人の母のもとでマカオに生まれる。マカオの商業学校に学び、高等学校までポルトガル式の教育を受ける。1960年代にマカオから出て香港、日本(沖縄)、アメリカ、日本(千葉県)と住まいを移す。現在もポルトガル国籍。父親が日本人であるため、日本に帰化することも可能だが、その気はなく、永住権も取得していない。家族は中国人の妻と娘・息子がいる。子どもたちはアメリカ在住。日本では共同通信社に勤務し、英語を駆使してデスクとして活躍した。定年退職したが、嘱託として今も週に数回出社している。

旅行を除き、マカオには戻っていない。マカエンセの教育・文化関連団体のひとつであるAPIM(マカエンセ教育推進協会)が主催する三年ごとの会合(おもにディアスポラのマカエンセを中心としてマカオで開催される)には必ず参加し、マカオ在住の知己たちと親交を温めている。

日本語、英語、中国語、広東語に精通。ポルトガル語は長期にわたり話したり書いたりしていないため、少しさびついているような気がする。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

自分にとってマカエンセのアイデンティティとして最重要なのはポルトガル式教育を受けていることとポルトガル語を話せることである。自分は一般的にマカエンセの最も重要な定義とされる「ポルトガル人の子孫」にはあてはまらないが、マカエンセであると思っているし、他のマカエンセからも同様に周知されている。

Q2. あなたのマカエンセとしてのアイデンティティの中に、「ポルトガリダーデ」(ポルトガルの精神性や価値観、ポルトガルとのつながり)を感じますか？

返還前のマカオ生まれのため、国籍はポルトガルだが、自分が「ポルトガル人」という意識はない。しかし、ポルトガルに対しては、「片思い (= 憧憬)」に似た感情を持っている。ポルトガルに対する反感やネガティブな感情はいつさいない。たとえばテレビでサッカーの試合があればポルトガルを心から応援する。

3) マカオ在住マカエンセからの電子メールによる「マカエンセのエスニック・アイデンティティ」に関する参考意見

〈ケース18〉I・D (女性・推定40代～50代・一般人)

在マカオポルトガル領事館勤務。ライフヒストリーは不明。筆者の研究活動の助けになればと自由形式の文章で意見を送ってくれた。

Q1. あなたにとって、マカエンセとは誰のことを指しますか？

ポルトガル人と中国人の混血の人々の子孫で、マカオに生まれた人。

Q2. 返還後8年経った今(2008年3月時点)、返還前と比較して、マカエンセの生活とアイデンティティに何か変化があったと思いますか？

中国にとっては「祖国への帰還」と考えられていた返還を前に、マカエンセ・コミュニ

ニティの若者たちが受ける教育はラディカルに変わった。マカエンセの子どもたちは中葡学校やインターナショナルスクールに通学するようになり、中国語と英語を修得するようになった。たとえば1989年生まれの私の甥は、小学校入学当時は母語としてポルトガル語を学び始めたが、途中で中葡学校に転校し、中国語の学習が主でポルトガル語は少しという割合に変わった。中等教育は両親の希望によってイギリスで受けることになった。確かに返還前は、マカエンセの大多数がポルトガル語学校に通っていたため、ポルトガル語の会話と読み書きはかなり高いレベルで修得しており、第二外国語は英語だった。そして地理的に中国広東地方に隣接していることから、マカオに住む者は、とくに商売のうえでは広東語を話せなくてはならなかった。マカエンセの多くは少なくとも三言語を日常で話しながら、結局どの言語も完全に修得できていなかった。マカエンセはポルトガル語で話をするとき、語彙が不足しているため、英語や中国語の単語を混ぜて話すことが多かった。

最近の婚姻は大多数がマカエンセと中国人のカップル。返還後、公用語が中国語とポルトガル語になってから、ポルトガル語で仕事をしていた公務員は働き続けるためには中国語を学ぶ必要が出てきた。今でもまだ中国語とポルトガル語の翻訳・通訳者は不足しており、その面で有能なものも少ない。もちろん、全く異なる文化を持つふたつの言葉の高いレベルで修得していなくては良い翻訳者にはなれないのだから、容易なことではない。公式文書は基本的なものを除き、全文書が公用語の二ヶ国語で書かれているとは限らない。マカオ政府は、とくに司法分野における職員に関しては、引き続きポルトガルの法学部を卒業した人材を多く登用している。司法面ではポルトガルの法律体制が継続しているからだ。

ポルトガル学校に通学する子ども達の数も減り続けている。ポルトガル語を話すマカエンセの数も減少し、その結果としてマカエンセ独特の習慣・しきたりも消えつつある。ポルトガル側はマカエンセ・コミュニティの保存や価値を重視しないので、マカエンセの伝統的祭礼や習慣は急激に消失している。ポルトガル人司祭の不足から、ポルトガル語で行なうミサも少なくなっている。

〈ケース19〉 E・C (女性・40代・一般人)

ケース11のA・F氏の同僚であるポルトガル人C氏の妻。自由記述の形でまとめた文書をA・F氏がインタビュー時に手渡してくれた。職業、ライフヒストリーは不明。

1. 返還後のマカオ社会におけるマカエンセの位置づけ

表面的には大きな変化はなかった。返還前の公用語はポルトガル語のみだったが、現在は「公用語は中国語であり、それ以外にポルトガル語を使用してもよい」。ポルトガル語はおもにポルトガルの血を引く人々によって使われていた言葉だったので、彼らの数が激減したことにより、中国語がポルトガル語よりも優位に立ったことは当然の結果だといえるだろう。中国人はマカオ人口の97%を占めており、中国語を修得することはひとつの「義務」となって、マカエンセは公務員社会や民間企業でもより力を発揮するためには中国語を学ばねばならない。マカオ基本法には「マカエンセの利害は保護され、その習慣と文化的伝統は尊重される」ことが明記されている。

2. 「ポルトガルの何か」というつながりによって基本的に形成されているマカエンセのアイデンティティに、返還と行政上の変化が原因となってもたらした結果は何か。また何らかの変化はあったのか？

ここで私から質問したい—「マカエンセは誰のことか?」「マカエンセをどう定義するのか?」と。ポルトガル人の子孫のことか? それともマカオに生まれ、ポルトガル語の教育を受けて育った人のことか? マカエンセを指す別の表現であった“filhos da terra” (かの土地の子どもたち) とは何か? ポルトガル生まれだがつねにマカオを母なる地と感じ、マカエンセ達の立場に立っていた故モライス・アルヴェス将軍はマカエンセと呼べるのか? この「ポルトガルの何か」は、ポルトガルの精神を持つこと、つまり良きマカエンセが非常に強く持っているつながり・絆¹⁷⁾。マカエンセは絶対にそのアイデンティティをなくすことはない。世界のどの場所でもマカエンセが住む場所にはマカエンセの教会やカーザ・デ・マカオ¹⁸⁾がある。マカエンセの家族が住む家には独特の雰囲気がある。マカエンセはいかなる変化にも適応することができるひとつの「人種」である。だからこそマカオが中国に返還されたことによってマカエンセがそのアイデンティティと居場所を失ってしまったと言うことはできない。それは本当ではない。それはマカオ基本法が明確に資本主義と返還前の生活様式は最低でも五十年間は変わらないと約束しているからだ。このような背景があったため、返還とポルトガル統治から中国統治への変化において動揺や混乱は起こらなかった。それはすなわち、生活の様式・方法・手段、つまり習慣やしきたりなどさまざまなことが全く (返還前と) 変わっていないということだ。変わったのはマカオの旗だけ。マカエンセは前と変わらずポル

(17) 本論の「1. はじめに」で紹介したポルトガリダーデ (portugalidade) を指すと考えられる。

(18) 注6参照。

トガルのパスポートを持ち、ポルトガル国籍を持ち、ポルトガル学校に通学し、キリスト教会に通うことができる。マカエンセは常にマイノリティだったけれど、そのマイノリティこそがマカオにとって特別なアイデンティティを形成しているのだ。

3. 返還後のマカオの急激な経済発展にマカエンセはどのように対応しているのか。また、マカエンセ・コミュニティはそのアイデンティティを維持するためにどのような努力をしているのか。

マカオは選択肢が少ないとても小さな都市であるため、マカエンセの家族は誰もがいつかは子どもたちを外国に送るという考え方をもって教育をしていたというのが事実である。クラスの生徒の半分以上が中等教育を終えるとポルトガル、オーストリア、カナダなどに進学するためにマカオを後にした時代もあった。それはその時代には大学もなければ高等教育機関も存在せず、進学したいものは海外に出て行くしか道がなかったからだ。そして、海外に出た者は誰もマカオに帰ってはこなかった。それはマカオには全員のための就職口がなかったからである。就職業界には選択肢は少なく、公務員と銀行、弁護士事務所などにくらかのポストがあるのみだった。一般住民のほとんどを占める中国人とのスムーズなやりとりのために、公務員社会は（ポルトガル語と中国語の）バイリンガルであるマカエンセをこぞって採用した。マカエンセやポルトガル人のうちでも、主になんらかの理由で進学しない、もしくは海外に移民しないことを選んだ人々にとって、公務員職は救いの神だった。現在はその立場が逆転した。「生き残る」ためにはマカエンセは中国語を勉強しなくてはならない。公務員社会での「太った牝牛たち」の時代はもう終わりを告げたのだ。

経済面では、自由市場として現在のような経済発展を見せているが、良き市民たちの生活に影響を及ぼし、インフレが進みマカエンセのファミリーだけでなく労働階級にまで（悪い）影響を及ぼしている。生活の質はこの三年間で悪くなっている。

マカエンセ・コミュニティはその規模が小さくなってはいるが、つねにそのアイデンティティを守るために闘ってきた。マカオ社会によく溶け込んでいると言っても過言ではない。我々の利害を守るために議会にも代表を数人送っている。そしてマカエンセが上層部にいる協会も数多くある。中国側もマカオにおけるマカエンセのアイデンティティを保存したいと考えている。なぜなら、そうでこそマカオはマカオらしさを発揮するのであり、マカエンセなしでのマカオは単なるほかの中国の一都市と変わらなくなるからだ。

4) ディアスポラ (ポルトガル在住) のマカエンセからのメールによる「マカエンセのエスニック・アイデンティティ」に関する参考意見

〈ケース20〉 E・S (男性・50代前半・一般人)

筆者の夫の知人のマカエンセ。50代前半。マカオで生まれ育ち、大学はポルトガルのポルト大学に進学。1997年までマカオ大学体育部門責任者。返還を機にマカオを出てポルトガルに「移住」した。現在はポルトガルのベイラ大学で体育を教えている。

曾祖父はポルトガル人で19世紀半ばに軍の将校として30歳前後にマカオに赴任、マカオ生まれの中国人である曾祖母と結婚、その後退役して民間人としてマカオに移住した。二人の結婚は正式に認められていたが、曾祖母はポルトガル国籍を所有していなかったと聞いている。二人の息子である祖父はポルトガル生まれのポルトガル人である祖母と結婚。父はマカオ生まれのマカエンセ、母はマカオ生まれのポルトガル人。筆者の研究活動の助けになればと自由形式の文章でメールにて意見を送ってくれた。家族は曾祖母以外の全員がポルトガル国籍を持っている。返還が決定してから家族で話し合い、中国化による失職と中国人による逆差別の恐れを考え、結局ポルトガルに「移住」することにした。本国、または祖先の故国への「帰国」では絶対にないので、自分としてはあえて「移住」ということばを使いたい。それは、私たち家族が周囲のポルトガル人からは今でも生粋のポルトガル人とは見られず、「移民」と呼ばれているから。自分の子どもも学校でそう言われている。自分の家族のマカエンセとしての血は自分の子どもの世代で終わると思っている。なぜなら孫はおそらくポルトガルで生まれることになるから。ディアスポラのマカエンセにとって、マカエンセのアイデンティティが失われていくのは必然であり、(自分の孫がポルトガルで生まれるとすれば)中国の片鱗さえ生活の中になくはない状況では、「ポルトガル人」以外にはなれないと思う。

自分にとって、マカエンセとは「マカオに生まれ、ポルトガルの血を受け継ぎ、ポルトガル語が話せる人」を指す。

中国返還前のマカエンセの社会的地位について説明したい。公共機関を中心に、ポルトガル語と広東語のバイリンガルのマカエンセは非常に優遇されていた。一部の最高職を除き、上級職のほとんどはマカエンセによって担われていた。ポルトガルの大学を出たマカエンセはさらに優遇されていた。自分もマカオで上級職についていたが、管理職

になったときに上司から伝えられた採用基準の順番は、能力や技能が同じ場合は、一番目がポルトガル人もしくはポルトガル語は非常に堪能なマカエンセ、二番目にポルトガル語が話せるマカエンセ、三番目がそれ以外のマカエンセ、最後にその他、の順だった。昇進にもこの序列がかなり影響していた。中国系住民の中に非常に優れた人材がいても、ポルトガル語ができない者はマカエンセと同等の扱いは受けることができなかった。

3. おわりに

人間は、ひとりひとりが異なるライフヒストリーを抱えて今を生きている。当たり前のことではあるが、マカエンセの人々の語りからは、それが実に強い印象とともに迫ってくる。ケース9のインフォーマントが詳しく説明しているように、マカエンセとはポルトガル人と現地中国人の間に生まれた「混血」だけではなく、さまざまな出自を持つ人々とその子孫である。こうした多様なカテゴリーの出自を持ちながら、マカエンセはポルトガルとの強い精神的な絆を中核におくエスニック・アイデンティティによって団結し、四半世紀もの間、独特の文化と精神性を引き継いできた。しかし、そのエスニシティが中国返還後十年も経たないうちに消失し、「中国(人)化」していく現状を目の当たりにして、筆者は(ポルトガル語とポルトガル文化を専門とする者として)思わず一種の「危機感」を感じ、正直残念に思う。

ここに挙げたのはわずか20例のマカエンセの意見であるが、自らのエスニシティの急激な変化と将来について、ある者は憂慮し、ある者は受容し、そしてある者は無関心であることがわかる。それは世代による違いでもあり、育ってきた環境による違いでもあるが、マカオ社会のエスニック・マイノリティとしてコミュニティを維持してきたにもかかわらず、成員ひとりひとりの出自があまりにも多種多様であることにもその理由を見出すことができるのかもしれない。

なお、今回実施した20名のマカエンセへの聞き取り調査のうち、対面形式でおこなった16名のインタビュー内容から筆者が導き出した考察結果に関しては、流通情報学部紀要通巻第29号 (Vol.15, No.2 2011.3)「中国返還後のマカエンセ (Macaense) のエスニシティ変容—マカオ在住マカエンセ16名への聞き取り調査から—(2)」に詳しくまとめ、論考をおこなった。合わせて参照されたい。